

## 第3章 貨幣あるいは商品の流通

### 第1節 商品の尺度

この著作全体をとおして、私は、単純化のために、金を貨幣商品として想定する。

貨幣の第1の主要な機能は、諸商品にその価値を表現するための素材を提供することである。言い換えると、諸商品の価値を、同じ名称の、質的に等しく、量的に比較可能な大きさとして表現することである。このようにして、貨幣は、価値の一般的尺度として用いられる。そして、ほかでもないこの機能のために、金は、特別な等価商品、貨幣になる。

貨幣が諸商品を通約可能にするのではない。正反対である。すべての商品が、価値としては、実現された人間労働であり、したがって通約可能だからこそ、それらの価値は同じ1つの特別な商品によって計ることができるし、その特別な商品は、諸商品の価値の共通の尺度に、すなわち貨幣に転化される。価値の尺度としての貨幣は、諸商品に内在する価値の尺度である労働時間が、必然的にまとわなければならない現象形態である<sup>1</sup>。

ある商品の価値の金による表現—— $x$  量の商品  $A = y$  量の貨幣商品——は、その商品の貨幣形態すなわち価格である。いまや、鉄の価値を社会的に認められた方法で表現するためには、1トンの鉄 = 2オンスの金という単一の等式で十分である。もはや、この等式が他のあらゆる商品の価値を表わす一連の等式の1つとして現われる必要はまったくない。なぜなら、等価商品、金は、いまや貨幣の性質をもっているからである。相対的価値の一般的形態は、単純なあるいは個別的な相対的価値というその最初の姿を取り戻した。他方で、相対的価値の拡張された表現、果てしない等式の連鎖は、いまでは、貨幣商品の相対的価値に特有の形態になっている。この連鎖そのものも、与えられたものとして、現実の諸商品の価格として社会的に認められている。あらゆる種類の商品で表現された貨幣の価値の大きさを知るには、価格表の等式を後ろから読むだけでよい。しかし、貨幣そのものは価格をもたない。もし、貨幣をこの点で他のすべての商品と同じ立場に置こうとすれば、貨幣を貨幣そのものに貨幣自身の等価物として等置しなければならないだろう。

商品の価格あるいは貨幣形態は、一般に商品の価値形態と同じように、商品の手で触ることのでき

<sup>1</sup> なぜ、貨幣は、1枚の紙幣がたとえば  $x$  時間の労働を表わすというふうに、直接労働時間を表わさないのか、という問題は、根本的には、なぜ、商品生産が与えられれば、生産物は商品形態をとらざるを得ないのかという問題と同じである。このことは、生産物が商品形態をとることはそれらの商品と貨幣とへの分裂を意味するということから、明らかである。あるいは、なぜ、私的労働——私的個人の勘定でおこなわれる労働——が、その反対物である直接に社会的労働と見なされることはできないのか？ 私は、他の場所で、商品生産に基礎をおいた社会における「労働貨幣」というユートピア的な考えを徹底的に検討したことがある（同前〔『哲学の貧困』〕、61ページ以下）。この点にかかわってさらに指摘しておきたいことは、オーウェンの「労働貨幣」は、たとえば劇場のチケットが貨幣でないのと同じように、貨幣ではないということである。オーウェンが想定したのは直接に結合した労働であって、それは商品生産とはまったく両立しない生産形態である。労働証明書は、共同労働に占める個人の持ち分、消費に向けられるべき共同生産物の一定部分にたいする彼の権利を表わす単なる証拠にすぎない。しかし、商品生産を前提にしながら、同時に、貨幣を何とかすることによって、商品生産の必要諸条件をまぬがれようとするなど、オーウェンには思いつきもしないことである。

る現物形態とはまったく異なった形態である。したがって、それは純粹に観念的な、あるいは精神的な形態である。目に見えないとはいえ、鉄や亜麻布、穀物の価値は、まさにそれらの製品のなかに、実際に存在している。価値は、それら製品の金との同等性によって、こう言ってよければ、製品自身の頭のなかにしか存在しない1つの関係によって、観念的に知覚可能なものになる。したがって、それら製品の所有者は、それらの価格を外部世界に伝える前に、それらに代わって自分で喋るか、それらに値札を下げるかしなければならない<sup>2</sup>。商品の価値表現は単に観念的な行為だから、この目的のためには、想像上の、あるいは観念的な貨幣を使用することが許される。どの商人も、自分の財貨の価値を価格もしくは想像上の貨幣で現わしたからといって、それら財貨を貨幣に転化させたことにはならないこと、そして、数百万ポンドの財貨の価値をこの金属で計るためには、本物の金の一片すら必要としないことは知っている。だから、貨幣が価値の尺度として用いられるとき、それは想像的あるいは観念的貨幣として使用されるだけである。この事情は、きわめて野蛮な諸理論を生み出した<sup>3</sup>。しかし、価値尺度の機能を果たす貨幣が観念的な貨幣にすぎないと言っても、価格は、貨幣となる現実の物質にまったく依存している。1トンの鉄に含まれる価値、すなわち人間労働の量は、鉄と同じ量の労働を含んでいる貨幣商品のしかるべき量によって、想像において表現される。したがって、価値尺度が金であるか、銀であるか、それとも銅であるかにしたがって、1トンの鉄の価値はさまざまな価格によって表現される、言い換えれば、それらの金属のそれぞれまったく異なる量によって代表されるだろう。

したがって、もし、金と銀というように、2つの異なる商品が同時に価値尺度であれば、あらゆる商品が2つの価格をもつ。1つは金価格であり、もう1つは銀価格である。これらは、金の価値にたいする銀の価値の割合が、たとえば銀15対金1で変わらない間は、平穩に並存している。それらの割合が変化するたびに、商品の金価格と銀価格との間に存在する比率がかき乱される。こうして、二重の価値基準は基準の機能とは両立しがたいことが、事実によって証明される<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> 野蛮人や半ば文明化された種族は舌を違ったふうにする。キャプテン・パリーは、パフィン湾の西海岸の住民について、「この場合（彼が言っているのは物々交換のことだ）、彼らはそれ（彼らにたいして提示された諸物）をその舌で2度なめる。そのうち、彼らは、取り引きが満足のうち終わったと見なしているように思われた」と述べている。同じように、東エスキモー人は、彼らが交換で受け取った商品をなめる。もし、舌が、このように、北において領有の器官として用いられたとすれば、南において、お腹が蓄積された財産の器官として用いられることや、カフィル人がある男の富を彼のお腹のサイズで見積もることも不思議ではない。自分たちが何をやっているかをカフィル人が分かっていることは、1864年のイギリスの公式健康報告が、労働者階級の大部分のなかで脂肪形成栄養物の欠乏を公表した同じ時に、ハーヴィー博士なる人物（とはいえ、有名な血液循環の発見者のことではない）がブルジョアジーと貴族の脂肪過多を引き下げたための処方箋を宣伝することによって一財産もうけた、という事実が示している。

<sup>3</sup> カール・マルクス『経済学批判』、「貨幣の度量単位にかんする諸理論」、53ページ以下、を見よ。

<sup>4</sup> 「金と銀とが、法律によって、並行して貨幣あるいは価値尺度の機能を果たすように定められているところではどこでも、つねに、それらを同じ1つの素材として扱おうとする努力が払われたが、ムダだった。一定量の労働時間がそのなかに合体された金量と銀量の割合が変化しないと想定することは、事実上、金と銀は同じ1つの素材であり、より価値の少ない素材である銀の一定量は同じ金量の一定割合部分であると想定することである。エドワードⅢ世の治世〔在位1327～77年〕からジョージⅡ世の時代〔在位1727～60年〕まで、イングランドの貨幣の歴史は、金銀の価値の法定比率とそれらの実際の価値の変動との衝突によって生じた、長い一連の動揺から成り立っている。あるときは金が高く、またあるときは銀が高かった。一定の期間、その価値より低く評価された金属は、流通から引き上げられ、溶かされ輸出された。それから、2つの金属の比率が再び法律で定められたが、新しい名目比率はすぐに再び実質比率と衝突した。最近では、

決まった価格を持つ商品は、次の形式のもとに表わされる。a 量の商品  $A=x$  量の金、b 量の商品  $B=z$  量の金、c 量の商品  $C=y$  量の金、等々。ここで a、b、c は商品 A、B、C の決まった量を表わし、x、z、y は金の決まった量を表わす。したがって、これら商品の価値は、想像の中で、さまざまな量の金に変えられている。したがって、人を混乱させるような商品の多様性にもかかわらず、それらの価値は、同じ名前の大きさ、金の大きさになっている。いまや、それら商品は互いに比較し合い、計り合うことができる。そして、それらを、度量単位としての金のある固定された量と比較することが技術的に求められるようになる。この単位は、さらにいくつかの整除部分にさらに等分されることによって、度量標準あるいは度量スケールとなる。金や銀、銅は、それらが貨幣になる前から、すでに重量標準のなかにそのような度量標準を持っている。その結果、1 重量ポンドは、それを単位として用いながら、一方ではオンスに分割することができるし、他方で集めてハンドレッドウェイトにすることもできる<sup>5</sup>。あらゆる金属通貨において、貨幣あるいは価格の度量標準につけられた名称が昔の重量標準から取られているのは、このためである。

価値尺度および価格の度量標準として、貨幣は、2 つのまったく異なる役割を果たさなければならない。貨幣が価値尺度であるのは、それが社会的に認知された人間労働の化身だからであり、それが価格の度量標準であるのは、それが固定された重さの金属だからである。価値尺度として、貨幣は、多種多様なすべての商品の価値を価格に、想像上の様々な分量の金に置き換える役割を果たす。価格の度量標準として貨幣は、それらの金の重量を計る。価値尺度は諸商品を価値とみなして計るが、反対に、価格の度量標準は様々な重さの金を単位重量の金で計るのであって、ある量の金の価値を別の金の重さで計るのではない。金を価格の度量標準にするためには、しかるべき重さが単位として確定されなければならない。同じ名称で呼ばれるさまざまな量を計るあらゆる場合と同じように、この場合には、変わらぬ度量単位を打ち立てることが要である。したがって、単位が変化にさらされることが少なければ少ないほど、価格の度量標準はその役割をするよりうまく果たすのである。しかし、金が価値尺度として役立つのは、金自身が労働生産物であるから、したがって、潜在的には価値が

インド・中国の銀需要の結果、金の価値が銀の価値にくらべて、わずかに、また一時的に下落したが、それは、フランス国内において、はるかに大きなスケールで同一の現象を生み出した。すなわち、銀の輸出、それに金による流通からの銀の排除である。1855、1856 および 1857 年には、フランスにおける金輸出を上回る金輸入の超過額は 4,158 万ポンドに達したが、他方で、銀輸入を上回る銀輸出の超過額は 1,470 万 4,000 ポンドだった〔新メガでは 3,470 万 4,000 ポンドに訂正されている〕。実際、両方の金属が法定の価値尺度となり、したがって両方が法定の支払い手段となっている国々では、だれもがどちらの金属で支払う選択権を持ち、価値が上昇した金属には打歩が生じ、他のあらゆる商品と同じように、その価格を、割高に評価された金属——現実には、それだけが価値基準として用いられる——で計られる。この問題にかんするすべての経験と歴史から導かれる結論は、ただ単に、法律によって 2 つの商品が価値尺度の役割を果たしているところでも、実際には、ただ 1 つの商品がその地位を占めるということである」（カール・マルクス、同前〔『経済学批判』〕、52、53 ページ）

<sup>5</sup> イギリスでは貨幣の度量単位として金 1 ポンドが用いられているにもかかわらず、ポンド・スターリングが金の整除部分を形づくらないという奇妙な慣習は、次のように説明されてきた。「われわれの鑄貨制度は、もともと銀のみの使用に適合したものだ。だから 1 オンスの銀はいつでも適当な個数の鑄貨に分割することができる。しかし金は、銀に適合した鑄貨制度にもっと後の時代になって導入されたから、1 オンスの金は整除個数の鑄貨に鑄造することができない」（マクラレン『通貨概史』ロンドン、1858 年、16 ページ）。

変わりうるものであるからに他ならない<sup>6</sup>。

まず第1にまったく明らかなことは、金の価値の変化が、価格の度量標準としての金の働きに少しも影響しない、ということである。金の価値がどれほど変化しようと、様々な量の金属どうしの比率は変わらない。どんなに価値が下落したとしても、12オンスの金は1オンスの金の12倍の価値を持っている。そして価格において考慮される唯一の事柄は、様々な量の金と金との関係である。一方で、1オンスの金の価値が高騰したり下落したりするからと言って、1オンスの金の重さが変わることはないのだから、その整除部分には何の変化も生じ得ない。こうして、金は、その価値がどれほど大きく変化しても、不変の価値尺度としてつねに同じ役割を果たすのである。

第2に、金の価値の変化は、価値尺度としての金の役割を妨げない。変化はすべての商品に同時に影響する。したがって、他の事情が同じであれば、すべての商品は、いまやより高い金価格あるいはより低い金価格で表されているが、それらの相対的価値は互いの間では変わらないのである。

ある商品の価値を、ある決まった量の、他のなんらかの商品の使用価値ではかったときのように、商品の価値を金ではかる場合も、想定されているのは、一定量の金の生産には、ある特定の時代には、ある決まった量の労働が費やされているということだけである。価格の全般的な変動について言えば、それらは、これまでの章で研究された基礎的な相対的価値の諸法則に従っている。

商品価格の全般的な上昇が起こりうるのは、貨幣価値は変わらずに諸商品の価値が上昇するか、商品価値は変わらずに貨幣価値が下落する場合だけである。反対に、商品価格の全般的な下落が起こりうるのは、貨幣価値は変わらず商品価値が下落するか、商品価値は変わらずに貨幣価値が上昇する場合だけである。だから、貨幣価値の上昇が必然的に商品価格の比例的な下落をとまなうとか、貨幣価値の下落が商品価格の比例的な上昇をとまなうということには決してならない。そういう価格変化が起こるのは、価値の変わらない商品の場合だけである。例えば、商品価値が貨幣価値と同時に比例して上昇すれば、価格の変動は起こらない。もし商品価値の上昇が貨幣価値の上昇に比べてゆっくりであるか、あるいは急速であるかすれば、商品価格は、商品価値の変化と貨幣価値の変化との差に規定されて、下落するか上昇するだろう、等々。

さて、価格形態の考察に戻ろう。

次第に、貨幣の役割を果たしている、様々な重さの貴金属の現在の貨幣名と、それらの名前が元来表わしていた実際の重さとの不一致が生じる。この不一致が生じた歴史的な理由は、以下の通りである。1) 不十分にしか発展していない国への外国通貨の流入。これはローマ時代の早い時期に起こったことで、そこでは金貨や銀貨は初めは外国商品として流通した。これら外国通貨の名前はローマ本来の重量名とは決して一致しなかった。2) 富が増えるにつれて、より劣った貴金属はより優れた貴金属によって、価値尺度の地位から排除される。銅は銀によって、銀は金によって——たとえ、この順番が詩的年代記と矛盾するにしても<sup>7</sup>。例えば、ポンドという名前は実際に重さ1ポンドの銀に与えられた貨幣名だった。価値尺度として金が銀に置き換わったとき、同じ名前が、銀と金の価値の割合に従って、1ポンドの金の約15分の1に当てはめられた。こうして貨幣名としてのポンドという

<sup>6</sup> イギリスの著述家にとっては、価値尺度と価格の度量標準（価値の度量標準）とが言語に絶するほど混同されている。その機能が、その名称と同じように、つねに取り違えられている。

<sup>7</sup> さらにつけ加えれば、この順番は一般的歴史的な妥当性も持っていない。

言葉は、重量名としてのポンドとは別のものになる<sup>8</sup>。3) 何世紀にもわたって国王や王子によっておこなわれた貨幣の品位の引き下げ。その結果、元々の鑄貨の重さから名前だけが取り残される<sup>9</sup>。

これらの理由によって、貨幣名の重量名からの分離は、社会に認められた慣習になる。貨幣の度量標準は一方では純粋に伝統的なものであるが、他方では一般的な承認を得なければならないから、最終的には法律によって規定される。貴金属の1つのある決まった重さ、例えば1オンスの金が、公式にいくつかの整除部分に分けられ、ポンド、ドル、等々の法定名を与えられる。そのときから貨幣の単位として用いられるこれら整除部分は、さらに下位区分されて、シリング、ペニーと言った法定名をもった整除部分に等分される<sup>10</sup>。しかし、このような分割がおこなわれる前も後も、決まった重さの金属が、金属貨幣の標準なのである。唯一の違いは、分割の仕方と呼び方にある。

したがって、価格ないしは金の分量には商品の価値が観念的に転換されているが、それらは、いまでは鑄貨の名前に、あるいは金の度量標準の下位区分の法的に正当な名称に表わされている。したがって、1クォーターの小麦は1オンスの金に値する、という代わりに、それは3ポンド17シリング10 1/2ペンスに値するという。こんなふうに、商品は、自分がどれほどに値するかをその価格で表わす。そして、貨幣は、ある製品の価値を貨幣形態で固定することが問題になる場合にはいつでも、計算貨幣として役立つ<sup>11</sup>。

あるモノの名前は、そのモノの質とは違う何かである。ある男の名前がジェイコブであることを知ったからといって、その男について何かわかった訳ではない。貨幣についても同じである。ポンド、ドル、フラン、ダカッド等々の名前では、価値関係のあらゆる痕跡が消え去っている。これらカバラの象徴に隠された意味を求めることによる混乱は、これら貨幣名が商品価値を表わすと同時に貨幣の度量標準である金属重量の整除部分を表わすから、いっそう大きくなる<sup>12</sup>。他方で、商品の様々な物的形態と区別されるためには、貨幣が物質的で非意識的な、しかし同時に純粋に社会的な形態を取ることが絶対的に必要である<sup>13</sup>。

<sup>8</sup> このようにして、イングランドのポンド・スターリングは、その本来の重さの3分の1未満を表わすのである。連合以前のスコットランド・ポンドは36分の1を、フランスのリーブルは74分の1を、スペインのマラヴェーディは1000分の1未満を、そしてポルトガルのレイはもっと小さな部分を表わすのである。

<sup>9</sup> 「今日では単なる観念上の名称しか持っていない鑄貨は、あらゆる国において、もっとも古い鑄貨である。かつては、それらはすべて現実的だったし、それらが現実的であったから、人々はそれで計算をしたのである」(ガリアーニ『貨幣論』、前掲、153ページ)

<sup>10</sup> デヴィッド・アーカートは、その著『日常語』のなかで、イングランドの貨幣の度量標準の単位である1ポンド(スターリング)が今日では1オンスの金の約4分の1に等しいことの奇怪さについて指摘している。「これは尺度の偽造であって、度量標準の確立ではない」。彼は、この、金重量の「偽りの名称」のなかに、他のあらゆるものと同じように、文明化の偽造手段を見ている。

<sup>11</sup> ギリシア人が貨幣を使う目的は何かと尋ねられたとき、アナカルシスは「計算のためである」と答えた。(アテナイオス、第4巻第49、シュヴァイクホイザー編、1802年、第2巻)

<sup>12</sup> 「価格の度量標準として用いられるとき、貨幣は商品価格と同じ計算名で現われ、したがって3ポンド17シリング10ペンス半という金額が、一方では1オンスの重さの金を、他方では1トンの鉄の価値を意味するため、この貨幣の計算名は貨幣の鑄造価格と呼ばれる。ここから、金の価値はそれ自身の材料で計られ、他のすべての商品とは対照的に、その価格は国家によって定められるという驚くべき考えが生まれたのである。一定重量の金に計算名を与えることが、その重さの価値を固定することと同じことであると、誤って考えられたのである」(カール・マルクス、前出、52ページ)

<sup>13</sup> 『経済学批判』中の「貨幣の度量単位にかんする諸学説」53ページ以下を参照せよ。金または銀の決まった重量にすでに法的に使われている名称を、それらの金属のより大きな重量もしくはより小さな重量に移

価格は、ある商品の中に実現されている労働の貨幣名である。だから、ある商品とその価格を構成している貨幣額とが等価であるという表現は、一般に、ある商品の相対的価値表現は2つの商品が等価であることを言い表わしているというのと同様に、同義反復である<sup>14</sup>。価格は、商品のもつ価値の大きさを表わす指数であり、貨幣との交換比率を表わす指数であるが、それにもかかわらず、交換比率の指数は必ず商品のもつ価値の大きさの指数である、ということにはならない。2つの等しい社会的必要労働が1クォーターの小麦と2ポンド（約2分の1オンスの金）によってそれぞれ代表されていると仮定すれば、2ポンドは、1クォーターの小麦の価値の大きさを貨幣で表わしたものの、すなわちその価格である。いまもし諸事情によってこの価格が3ポンドに上昇することになるか、1ポンドに強制的に引き下げられるかしたとしよう。その場合、1ポンドも3ポンドも小麦の価値の大きさを正しく表わすには小さすぎるか大きすぎるかするだろう。しかし、それにもかかわらず、それらは小麦の価格である。なぜかといえば、第1に、それらは小麦の価値が表わされる形態、すなわち貨幣だからであり、第2に、小麦の貨幣との交換割合を表わす指標だからである。もし生産諸条件が、言い換えれば労働の生産力が変化しなければ、価格変化の前でも後でも、1クォーターの小麦の再生産には同じ量の社会的労働が支出されなければならない。この事情は、小麦生産者の意志にも、他の商品所有者の意志にも左右されない。

価値の大きさは社会的生産関係を表わし、何かある商品と、社会の総労働時間のうちその生産に必要とされる部分とのあいだに必然的に存在する関連を表わす。価値の大きさが価格に転化されるとともに、上記の必然的関係は、ある商品と、別の貨幣商品との多かれ少なかれ偶然的な交換割合のかたちをとる。しかし、この交換割合は、その商品がもつ価値の本当の大きさを表わすこともありうるし、その価値からは乖離した金量を表わすこともありうる。商品は、事情によっては、その価値から乖離した金量で手放されるかもしれない。したがって、価格と価値の大きさとの量的不一致、前者の后者からの乖離の可能性というのは、価格形態そのものに内在している。これは欠陥ではない。反対に、価格形態は、その内在的法則が、外見上は無法則的な、相互に影響し合う不規則性によってのみ貫徹する生産様式に見事に適合しているのである。

しかし、価格形態が両立しうるのは、価値の大きさと価格との量的不一致、価値の大きさとその貨幣表現との量的不一致の可能性だけではない。そこにはまた、貨幣が商品の価値形態以外の何ものでもないにもかかわらず、価格がまったく価値の表現でなくなってしまうほどの、質的な不一致も秘められている。良心、名誉、等々といったそれ自体は商品でないものが、その持ち主によって売りに出され、その価格をとおして商品形態を手に入れることができる。だから、あるものが、価値を持たな

し替えることによって、これらの金属貨幣の鑄造価格を上げたり下げたりすることにかんする幻想的な考え方—このような考え方は、少なくとも、それらが公的および私的な債権者にたいする不器用な金融的操作ではなく、経済的ないんちき治療法を目的とする場合については、ウィリアム・ペティ『貨幣論。ハリファックス侯閣下へ』1682年、によってすでに徹底的に論じられている。だから、もっと後代の後継者は言うまでもなく、彼の直接の後継者であるサー・ダドリー・ノースやジョン・ロックでさえ、ペティを浅薄化することしかできなかつた。ペティはこう言っている。「もし一国の富が一片の布告で10倍化できるとすれば、そのような布告がわが統治者たちによってはるか以前から出されてこなかつた、というのは不思議なことである」（前出、36ページ）

<sup>14</sup> 「そうでなければ、貨幣100万が等しい価値の商品よりも多くの価値をもっていることを、本当に認めなければならない」（トレーヌ、前掲書、919ページ）。そうすると、「ある価値は、それに等しい別の価値よりも多くの価値を持っている」ことも認めなければならない。

いにかかわらず価格をもつ、ということがありうるのである。この場合の価格は、数学における虚数のように、想像上のものである。他方で、想像上の価格形態のなかには、直接的・間接的に現実の価値関係が潜んでいることもある。たとえば、未耕地の価格がそうである。そこには人間労働が注ぎ込まれていないから、未耕地は価値を持たないのであるが。

価格は、一般的な相対的価値同様に、ある商品（たとえば1トンの鉄）の価値を、しかるべき量の等価物（たとえば1オンスの金）がその鉄と直接に交換可能であると言い表わすことによって表現する。しかし、それは決してその反対のこと、すなわち、鉄が直接に金と交換可能であるということを表わしてはいない。したがって、ある商品が実際に有効に交換価値であるためには、その物的な姿を手放さなければならず、自分自身を単なる想像上の金から現実の金に変態させなければならない。たとえ、商品にとってそのような聖体化が——ヘーゲルの「概念」にとっての「必然性」から「自由」への移行、ロブスターにとっての甲羅の脱皮、聖ヒエロニムスにとっての古いアダムの脱却<sup>15</sup>以上に——困難であるとしても。ある商品は、その現実的形態（たとえば鉄）と並んで、想像のなかでは金形態をとることもできるが、同一の時点において実際に鉄と金の両方であることはできない。その価格を確定するには、商品は想像上の金と等置すれば十分である。しかし商品がその所有者にとって普遍的等価物の役割を果たしうるためには、商品は現実に金によって置き換えられなければならない。もし鉄の所有者が、交換のために提供された他の商品の所有者のもとへ行き、鉄がすでに貨幣であることの証明として鉄の価格を彼に伝えようとするれば、彼は、ダンテが信仰箇条を唱えたときに、天国で聖ペテロがダンテに与えたのと同じ回答を得ることだろう。

その貨幣の品位と重量はすでに調べられた。

しかし、お前はそれを財布のなかに持っているかどうかを私に言わなければならない。

したがって、価格は、商品が貨幣と交換可能であることとともに、商品が交換されなければならないことも意味している。他方で、金は、それがすでに交換過程において貨幣商品として定着しているからこそ、観念上の価値尺度として役立つ。観念上の価値尺度の下には、固い現金が待ち構えているのである。

---

<sup>15</sup> ヒエロニムスは、砂漠で彼の幻想である美しい女性たちとたまたま出会ったことが示しているように、若いときには肉体的な肉欲と激しく格闘しなければならなかったが、それだけでなく、歳をとってからも、精神的な肉欲と格闘しなければならなかった。彼はこう言っている。「私は、自分が靈魂のなかで世界審判者の前にいると考えた」。「お前は何か？」と声が尋ねた。「私はキリスト者です」。「お前は嘘をついている」と偉大な審判者が大きな声で答えた。「お前はキケロの徒にすぎない」